

## 第1章 筑波大学生の生活意識の構造

本学の学生のスポーツ生活、余暇生活、正課体育への姿勢などを分析するに際し、学生の日常生活における生活意識や生きがい感について調査をすることは肝要な基礎的作業であると思われる。なぜならば、このような生活価値意識や生きがい充実感はスポーツ、余暇活動、正課体育の「構え」に大きく影響を及ぼすと考えられるからである。

本章の概略は以下の通りである。

- ① スポーツ動機に関与すると考えられるD. S. バット女史の理論フレームに従って、本学の学生の社会意識の構造を把握する。
- ② 本学の学生の生きがい充実感がどの程度の水準にあるかを把握する。
- ③ その生きがい充実度に影響すると考えられる生きがいを求める欲求を神谷美恵子の理論フレームに従って分析する。

本章では、このような社会的価値意識や生きがい充実度の観点から、本学の学生の生活意識の問題点を明確にし、それに対して正課体育ではいかに対処すべきかという点について何らかの提言ができればと企図している。また、第3章で扱う「生きがい充実度とスポーツ動機」に基礎的データを提示することも本章の大きな目的の一つである。

### 第1節 筑波大学生の社会意識の構造

本節では本学の学生が日常生活においてどのような社会的価値を重視しているかを明らかにし、学生のスポーツ実践、余暇活動などの背景を探ろうと試みた。

#### §1. 社会的価値の項目設定

本調査では社会的価値として選定したQ8の17項目はD. S. バットのスポーツの動機づけ理論に基づいて設定した。彼女のスポーツの動機づけ理論の概略は図1に示す通りである(注1)。

この理論枠組からすると、スポーツの動機づけに対する二次的強化要素はスポーツの報酬であり、それは内面的報酬と外面的報酬とに大別されている。彼女のこの理論フレームは、スポーツ実践に移行する際に一つの大きな動機づけとしてスポーツの報酬を位置づけている点に特徴がある。このような報酬を日常生活における社会的価値意識として問うことによって、本学の学生のスポーツ実践の深層を明確にすることが可能であろう。

ワーディングに関しては少々問題が残されたが、Q8では外面的報酬としての社会的価値意識を問う項目として次の7項目を設定した。

- ① 国民の平均以上の所得をあげること
- ② 社会的に認められている地位を得ること
- ③ 自分の能力が世の中に認められること
- ④ 人の役立つ人間になること
- ⑤ 人に喜ばれる人間になること

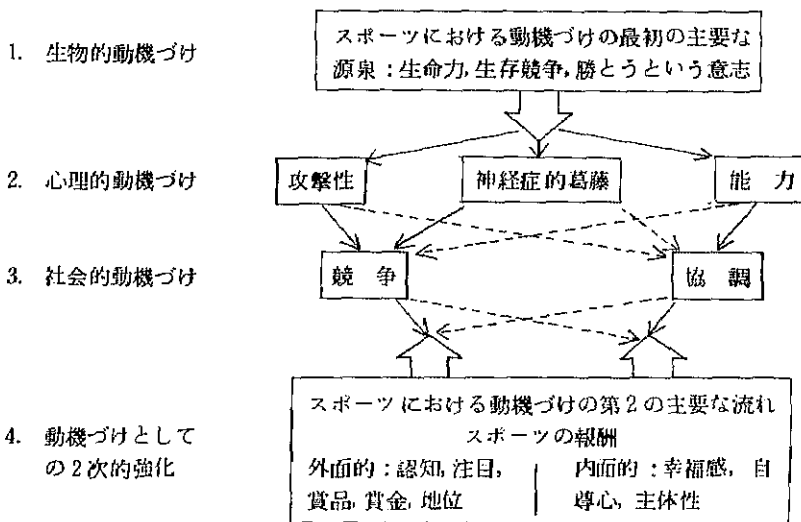
- ⑥ たえず自分の地位を高めること
- ⑦ 人に尊敬されるようにすること

内面的報酬としては次の10項目を設定した。

- ① 内面的充実感を得ること
- ② たえず努力を続けること
- ③ 向上心を失わないこと
- ④ 喜びや悲しみを友人と共感し合うこと
- ⑤ グループでものごとをやり遂げるようとする
- ⑥ 自分の能力の限界に挑戦すること
- ⑦ 友情をはぐくみ合うこと
- ⑧ 生きる自身を持つこと
- ⑨ 人生の厳しさに耐える力をつけること
- ⑩ 建設的な態度を身につけること

図1 スポーツにおける動機要因

動機づけのレベル



スポーツにおける動機づけは二つの主要な源泉—生物学的動機づけとスポーツ体制を通じて得られる強化—から来ている。心理的動機づけは、攻撃性、神経症的葛藤および能力という3つの基本的エネルギー・モデルに表わされている。実線と点線はその後の結びつきの強弱を表わす。攻撃性と神経症的葛藤は、競争という社会的動機づけに至る可能性がきわめて強い。協調に至る可能性は薄い。競争志向型の者も協調志向型の者もスポーツの強化によって影響を受ける。外面的報酬は競争志向型にとって、内面的報酬は協調型にとって、きわめて重要である。

表1は以上のQ 8の17項目について国民一般に実施した調査データを因子分析にかけた結果である(注2)。

表1 社会的価値意識に関する因子負荷行列表（回転後）

A - 外面的  
B - 内面的

	ファクター 1	ファクター 2	ファクター 3	ファクター 4	ファクター 5
	A ミエ	B 協 調	B' 自己啓発	B' 前向き姿勢	A' 奉仕精神
個 有 値	2.23922	2.01820	1.83076	1.73958	1.70366
寄 与 率	19.83037	17.87308	16.21314	15.40558	15.08756
累 積 寄 与 率	19.83037	37.70344	53.91659	69.32217	84.40973
1 所 得 平 均	-0.53808				
2 社 会 的 地 位	-0.81343				
3 能 力	-0.69841				
4 人 に 役 立 つ					-0.73619
5 人 に 喜 ば れ る					-0.77259
6 地 位 を 高 め る	-0.68165				
7 内 面 の 充 実				-0.55334	
8 た え ざ る 努 力				-0.56352	
9 人 に 尊 敬 さ れ る					
10 向 上 心				-0.70062	
11 友 人 と 共 感		-0.62897			
12 グ ル ー プ で や る		-0.74540			
13 限 界 に 挑 戦		-0.50085			
14 友 情 を は ぐ く む		-0.61777			
15 生 き る 自 身			-0.70785		
16 人 生 に 耐 え る			-0.75673		
17 建 設 的 態 度			-0.55467		

この因子負荷行列表によれば、外面的報酬はファクター1（ミエ）、5（奉仕精神）の2グループに、内面的報酬はファクター2（協調）、3（自己啓発）、4（前向き姿勢）の3グループに分類されることがわかる。このことから、外面的報酬としての項目「人に尊敬されるようにすること」を除き、質問のワーディングはD. S. バット女史の理論に沿っているということができよう。

バット女史の理論フレームによれば、外面的報酬に重きを置く社会的価値意識は競争志向型のスポーツ動機を、内面的報酬にウェートを置いた社会的価値意識は協調志向型のスポーツ動機をそれぞれ強化することになる。本学の学生の社会的価値意識がこの内面的報酬、外面的報酬のいずれにウェートが置かれたものかを知ることによって、学生のスポーツ動機の強化要因の方向を知ることができる。

## §2. 筑波大学生の社会意識の一般傾向

図表2は本学学生の一般学生男女および体育専門学生男女、国民一般男女別に一般傾向を図示したものである。

図表2 社会的価値意識重視の学年推移及び体育専門学生・国民一般との比較

所属 学年・性別 重視項目	一般男子学生				一般女子学生				一般生		体育専門学生		国民一般 (10~20代)	
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	男子	女子	男子	女子	男子	女子
	1 所得平均								☆					
2 社会的地位								☆						
3 能力	**	*	**	**	**	*	*		**	*	**	*	*	
4 人に役立つ	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	*
5 人に喜ばれる	**	**	*	*	**	**	**	**	*	**	**	**	*	**
6 地位を高める	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆		☆
7 内面の充実	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
8 たえざる努力	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
9 人に尊敬される														*
10 向上心	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
11 友人と共感	**	*	*	*	**	*	**	**	*	**	**	**	*	**
12 グループでやる		*			*						*	*		
13 限界に挑戦	**	**	**	**	**	**	**		**	**	**	**	**	*
14 友情をはぐくむ	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	*
15 生きる自身	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
16 人生に耐える	**	**	**	*	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
17 建設的態度	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	*	*	**	*

(☆40%以下, \*60%台, \*\*70%台, \*\*\*80%台, \*\*\*\*90%台)

まずこの図表からいえることは、本学の学生は全体的に外面的報酬に関わる社会的価値をあまり重視せず、内面的報酬に関わる社会的価値に重きを置いていることである。

この図表からはあまり明確ではないが、学年が進行するにつれて、一般学生男女間に差が生ずる社会的価値にはあるまじりかたがみられる。男子学生では、「ミエ型」の社会的価値が学年進行に伴い、重視する割合が高くなる。他方、女子学生では逆に低くなっていく。また、女子学生では「奉仕型」「協調型」の社会的価値重視度が高くなり、逆に男子学生では低くなっている。男子学生は、4年生になると、社会人としての価値意識に志向し、女子学生は、女性らしさ、やさしさ、奉仕精神、友情などの価値を強く志向するようになることがうかがえる。また、学生が進行するに伴って、「自己啓発型」の価値意識は徐々に割合が低くなっていく。これは、学年が進行するにつれて、初期の高貴な理想も徐々にあきらめに変っていきと解釈できよう。内面的報酬に関わる「前向きの姿勢」は男女とも総じて高い重視度を示し、学年が進行するにつれてあまり変化はみられない。

一般学生の男女間の差としては、男子学生が外面的報酬に対して積極的志向を示しているが、女子学生は内面的報酬を重視していることがあげられる。つまり、女子学生は「人間関係を大切にし、自己の内的充実・向上心、前向きの姿勢を失わず、かつ他人に奉仕する精神に富んでいる」といえ

る。

一般学生と体育専門学生とを比較してみるならば、一般学生は外的に認められる志向とともに自己の内的能力（前向き姿勢）を大切にする傾向がみられ、体育専門学生は「人間関係」を重視し、かつ「自己の能力にチャレンジする精神」に富むといえよう。

参考までに国民一般のデータと比較してみた。一般男子学生は国民一般よりもより「内的充実感」を大切にしている。また、一般女子学生は「内面的自身」「向上心」などの価値を大切にし、かつ「友情をはぐくみ合い」社会的にも自己の内的能力が評価されることを望んでいる。

以上の結果から、一般学生を対象としている正課体育のカリキュラムでは協調志向型に結びつくスポーツを選択させるようなガイダンスが必要であろう。とくに、人間関係を重視した正課体育指導の必要があると思われる。また、体育専門学生と比較したことから明らかなように、自己の能力の限界にチャレンジする精神はスポーツ経験が豊かになれば可能となると思われるため、その方向を含めた正課体育のあり方を探る必要がある。そのような正課体育の方向から、協調と競争の両志向が調和のとれたスポーツの動機づけが可能になるとと思われる。

### § 3. 社会的価値の類縁関係

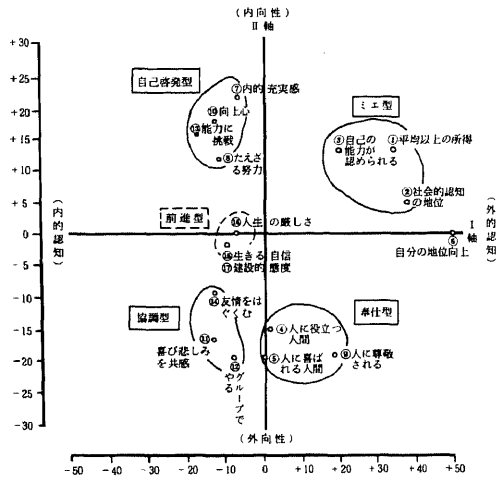
次に、前述した17項目に対する社会的価値意識の類縁関係を検討してみた。本学の学生の社会的意識の構造を分析するに当たって、このような社会的価値の重視傾向に何らかのまとまりがあることを仮定として、林の数量化理論Ⅲ類によって計量化してみた。この数量化理論Ⅲ類は、質的データを量的データに変換することによって、変量の特性和類縁関係を明らかにする分析モデルである。それゆえ、本学の学生の社会的価値重視傾向の類縁関係を明らかにする際には有効な分析手法であるといえる。ここでは数量化理論Ⅲ類によって17項目の社会的価値を2次元空間（平面）に布置して社会的価値空間を決定するとともに、各々の社会的価値重視度の類縁関係を明確にするという方法をとっている。その結果は図3に示した通りである。

図3では、一般学生の場合にはⅠ軸を「内的認知-外的認知軸」Ⅱ軸を「内向性-外向性軸」と名づけ、社会的価値を前述した因子分析における5類型のファクターに対応して「自己啓発型」「ミエ型」「協調型」「奉仕型」「前進型」の5類型に類別した。体育専門学生の場合、Ⅰ、Ⅱ軸では類別できなかったため、Ⅲ、Ⅴ軸をそれぞれ「内的認知-外的認知軸」「内向性-外向性軸」とした。

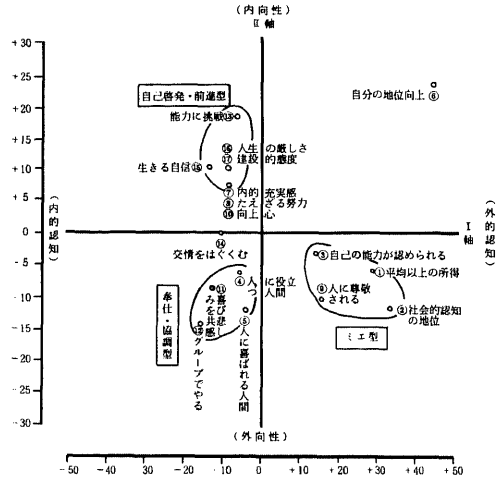
この図によると、一般男子学生の社会的価値重視度の類縁関係は先に示した因子分析による5類型に対応しており、国民一般と同じ傾向をもっていることが明らかである。すなわち、社会的価値意識が5類型に非常に明確に構成されていると結論づけることができる。一般女子学生はあまり明確に5類型に類別できないが、外面的報酬と内面的報酬との類別は可能である。一方、体育専門学生の場合には、Ⅰ、Ⅱ軸段階の社会的価値空間において全く類縁関係がみられず、Ⅲ、Ⅴ軸段階でようやく弱い類縁関係がみられた。このことから、体育専門学生の社会的価値観は非常に中性的であると結論づけることができる。

図3 社会的価値空間

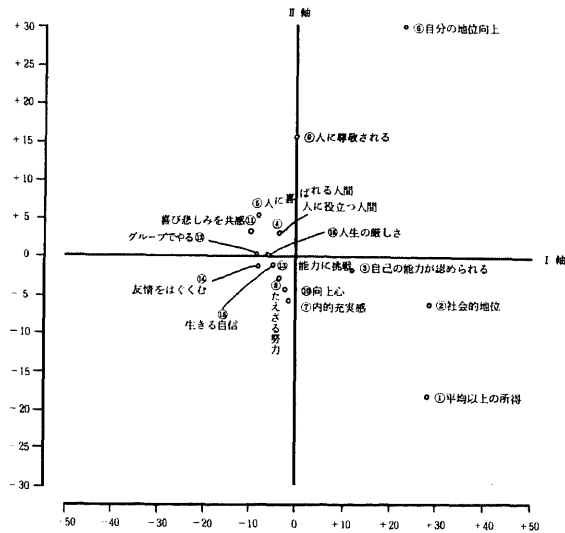
1. 一般男子学生



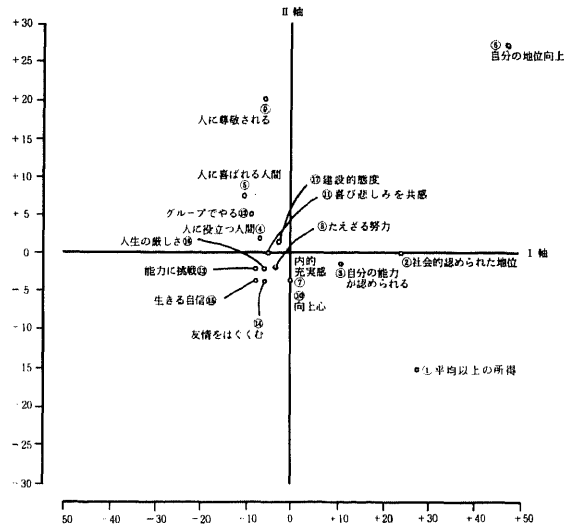
2. 一般女子学生



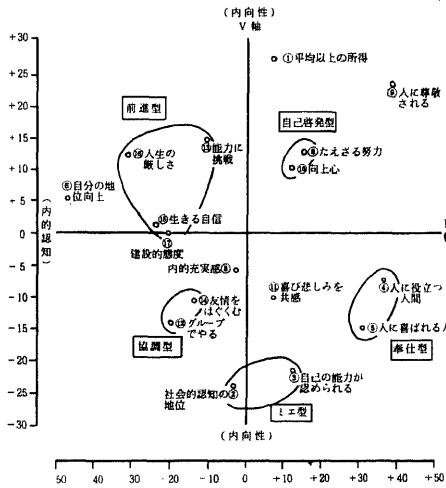
3. 体育専門男子学生



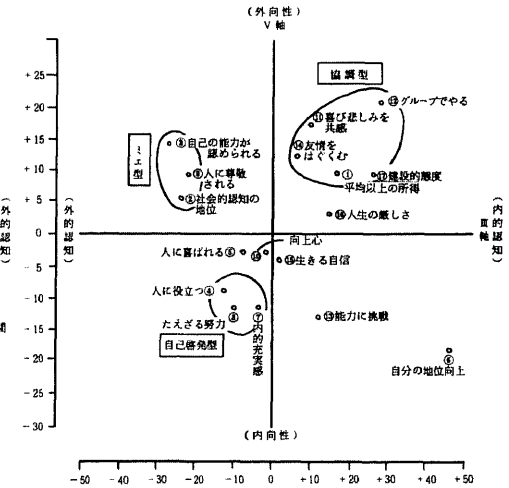
#### 4. 体育専門女子学生



#### 5. 体育専門男子学生



#### 6. 体育専門女子学生



#### §4. 協調志向型のスポーツの動機づけ

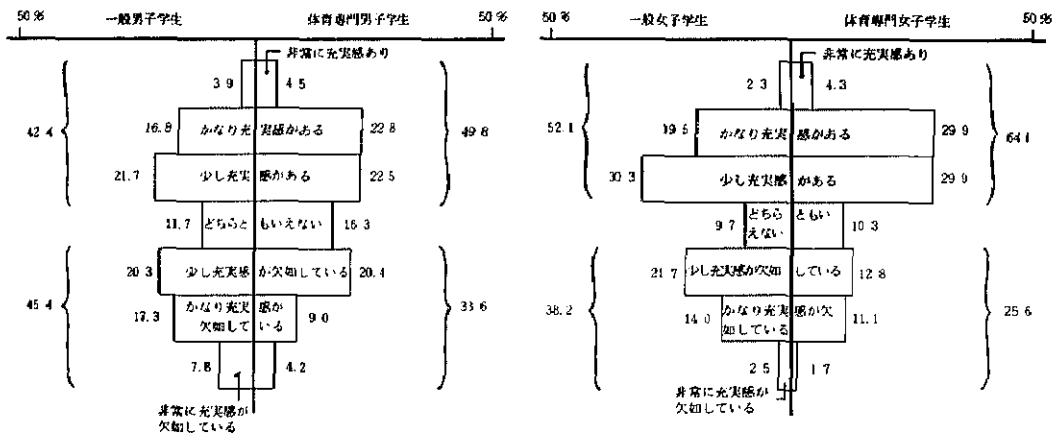
本節では本学の学生の社会的価値意識の構造を探ってきたが、以上の結果から明白なように、一般学生の場合、社会的価値意識が内面的報酬、外面的報酬に対して明確に構成されている。また、内面的報酬を重視している傾向とも合せて結論するならば、正課体育ではスポーツの動機づけをしやすいということが指摘できよう。つまり、一般学生の場合、スポーツに対して競争志向型の動機づけを目指してもあまり正課体育の効果はあがらず、協調志向型のスポーツの動機づけを優先することの方が効果が大きいといえよう。

### 第2節 筑波大学生の生きがい充実度

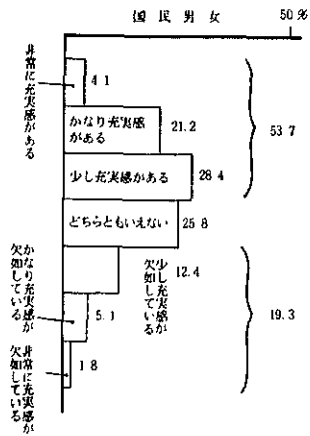
本学の学生が日常どの程度生きがいを感じているかを知ることは、学生の学業生活、スポーツ生活、余暇生活、人間関係などを知るための有効な基礎的資料となろう。正課体育においても一般学生の余暇生活の活発化、生涯スポーツへの志向などを指すに当たって、学生の生きがい充実度の水準を把握しておくことは重要なことである。正課体育のみで学生の日常生活全体の生きがいを高めることは不可能なことではある。しかしながら、このような生きがい充実度の水準に関する資料は、ガイダンス、体育理論講義などのサービスをする上で、バックデータとして十分利用できるものであり、また、利用する必要があると思われる。

そのために、本学の学生の生きがいなどの程度充実しているかを知ることとを目的として、7段階評価の自己申告の質問を設定した(Q9)。結果は図4に示す通りである。

図4 生きがい充実







Q9 現在、あなたは、あなたの生活に全体として生きがいや充実感をどの程度感じていますか。

この図から、国民一般のデータが正規分布しているのに対し、本学の学生の生きがい感は2極化している点に大きな特徴がみられる。そのために「生きがいなし」と答えた割合が高くなっている。本学の一般学生が生きがい感に欠けている原因については別の調査に譲らねばならないが、何らかの教育的配慮が必要とされることは疑いえない。正課体育においても、この点を考慮した学生指導が肝要である。

一般学生の男女間の生きがい感の差についてみると、「充実感あり」と答えた割合は男子学生が42.4%、女子学生52.1%である（注3）。一方、「充実感なし」と答えた割合は男子学生が45.4%、女子が38.2%であり、一般女子学生の方が生きがいが高いといえる。

一般学生と体育専門学生とを比較してみると、「充実感あり」と答えた割合は体育専門女子学生64.1%、一般女子学生52.1%、体育専門男子学生49.8%、一般男子学生42.4%である。一方、「充実感なし」と答えた割合は体育専門女子学生25.6%、一般女子学生38.2%、体育専門男子学生33.6%、一般男子学生45.4%である。つまり、一般学生よりも体育専門学生の方が生きがい充実度が高いといえる。また、男子学生よりも女子学生の方が総じて生きがい充実度が高いこともうかがえる。

参考までに国民一般の10代男女、20代男女、および学生のデータと比較すると表2のようになっている。

表2 一般学生、体育専門学生、国民一般の比較

	体専女子	一般女子	体専男子	一般男子	20代女子	20代男子	10代男子	10代女子	学生男女
充実感あり	64.1%	52.1	49.8	42.4	49.0	45.6	41.3	40.3	42.2
充実感なし	25.6	38.2	33.6	45.4	35.6	33.6	36.8	35.6	37.3
得点化	462.5点	417.5	429.4	386.4	424.6	418.4	392.6	407.7	402.1

この表ではちなみに、7段階尺度に対応して生きがい充実度を得点化してみた。「非常に充実感あり」に7点、「かなり充実感あり」6点……「非常に充実感が欠如している」1点の得点を与え、それに百分率を乗ずるという方法をとった。この方法で得点化してみると、体育専門学生は男女とも高い生きがい充実度を示しており、一般男子学生は生きがい感に欠けていることがより一層明確になった。体育専門学生の生きがい感が高い原因は詳細な調査を待たねばならないが、日常的なスポーツ活動が関係している可能性は大いに考えられる。また、国民一般の中の学生の得点と比較するならば、本学の学生の生きがい充実度は、一般男子学生を除き、国民の水準以上にあることがわかる。

### 第3節 生きがいを求める7つの欲求

#### §1. 神谷美恵子の「生きがい」

生きがいの問題を検討するには神谷美恵子の生きがい論が有効な手掛りになると思われる。なぜならば、女史の『生きがいについて』は日本人の間で最もひろく読まれた著書であり、「生きがいブーム」の時代においても最も影響を及ぼしたものとされているからである。女子は生きがいを求める欲求として、これで凡てではないし個人差もあるとしながらも、次の7つの欲求をあげている。また、この生きがいを求める欲求に対応して、生きがいの対象として次の7つの領域をあげている(注4)。

- ① 生存充実感への欲求——最も基本的な欲求であるとされ、審美的観照、あそび、スポーツ、趣味的活動、日常生活のささやかなよろこび。
- ② 変化への欲求——学問、旅行、登山、冒険、収集活動など。生存充実感の欲求と密接につながっている。
- ③ 未来性への欲求——種々な生活目標、夢、野心など。変化への欲求が導くものであり、これらの生が新しい発展をもたらすであろうと期待するもの。
- ④ 反響への欲求——共感や友情や愛の交流、優越や支配によって他人から尊敬や服従をうけること、服従と奉仕によって他人から必要とされること。
- ⑤ 自由への欲求——①の生存充実感の欲求をみたまの他、スター的存在も含まれる。
- ⑥ 自己実現の欲求——個性的な生きがい但凡て含まれる。文化、芸術、料理など独自性を帯びる可能性のあるもの。
- ⑦ 意味と価値への欲求——⑥の自己実現の欲求と密に関連し、自分の存在意義の感じられるような仕事や使命、真・善・美・聖の領域である。

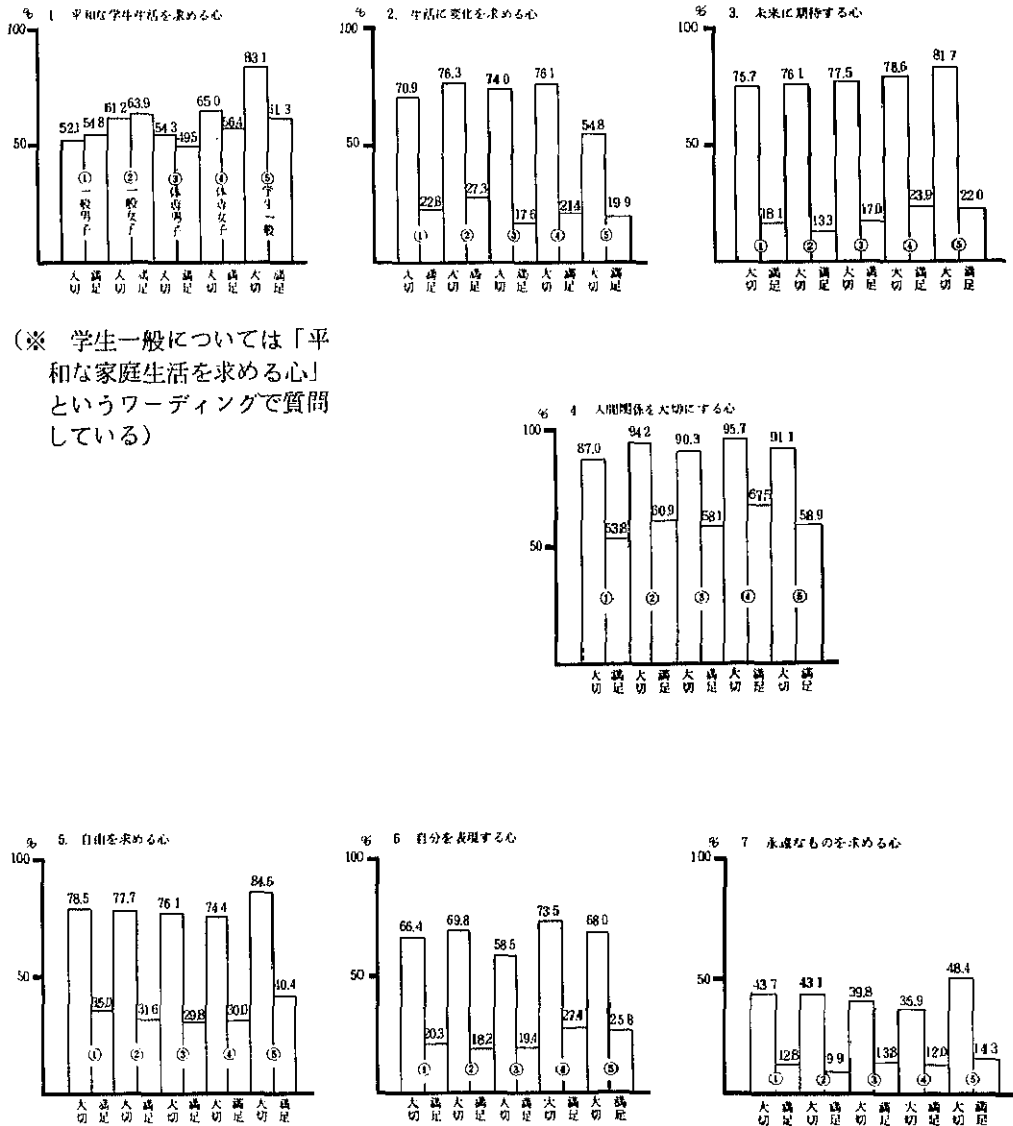
以上あげた神谷の生きがい論のフレームに従って、日本人の生きがいの構造が社会調査によって把握されている(注5)。この調査では、7つの欲求について質問する際に回答者のホンネが出やすいように、ワーディングに配慮がなされている。その結果、「生存充実感への欲求」は「平和な家庭生活を求める心」に、「反響への欲求」は「人間関係を大切にしたい心」に、「意味と価値への欲求」は「永遠なものを求める心」に、それぞれ変換されている。このような点を考慮して本調査

では さらに「生存充実感への欲求」を「平和な学生生活を求める心」に変更して質問している。

## § 2. 筑波大学生の一般傾向

上述した7つの生きがいを求める欲求に対して、その大切度と満足度を質問（Q10）した結果を 図5 に示した。

図5 生きがいを求める7つの欲求の一般傾向



一般学生の男女間の差違について検討するならば、女子学生の方が「平和で人間関係を大切に生活を送り、かつ生活変化を求めている」といえよう。

一般学生と体育専門学生とを比較してみると、一般男子学生は「自由を求め、自己を表現する心を大切に、かつ満足している」割合が高くなる。体育専門男子学生は「人間関係を大切に、かつ満足している」割合が高くなっている。一般女子学生は「生活に変化を求め、自由を求める心」の割合が僅かに高くなり、体育専門女子学生は「自分を表現し、人間関係を大切に、未来に期待している」割合が高くなっている。

以上の結果から、一般的傾向としては、一般学生は「自由」「変化」「自己表現」する心を大切にしており、体育専門学生は「人間関係」を大切にしている傾向が僅かながらうかがえる。体育専門学生についてはスポーツのクラブ制度が反映したものとも思われる。

国民一般の調査と比較するならば、本学の学生の特徴として「生活変化の欲求」の大切度が高いことがあげられる。その欲求に対する満足度が低いことから推測するならば、建設途上期の筑波研究学園都市の生活環境が大きく影響していると考えることができる。国民一般の方が本学の学生よりも重視している欲求として、「未来に期待する心」「自由を求める心」があげられる。正課体育では、一般学生のこのような生きがいを求める欲求との関係から、特に「生活変化の欲求」が満たされるような、スポーツ・ライフの計画化などの面の指導をも目指すことが肝要である。

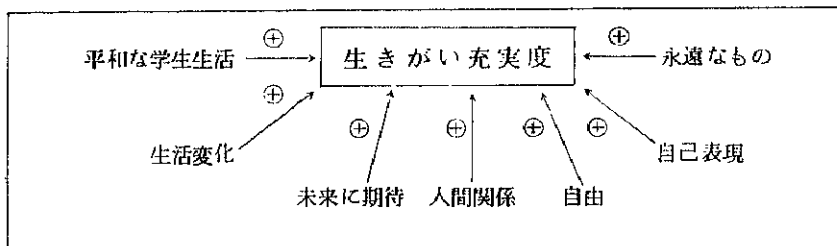
#### 第4節 生きがい充実度と生きがいを求める7つの欲求

本節では第2、第3節で分析してきた生きがい充実度と生きがいを求める7つの欲求との関係を明らかにすることを目的としている。そのための分析の方法として、多変量解析の手法を用いた。

##### §1. 生きがい充実度と生きがいを求める欲求との関係

まず、生きがい充実度と生きがいを求める欲求との関係について検討してみよう。神谷美恵子の生きがいを求める7つの欲求と生きがい充実度との関係は図6のように表わされよう（注6）。

図6 7つの欲求が生きがい充実度に与える影響



この図によると、各領域での満足度の高まりは凡て生きがい充実度を高めるということになる。この仮説に対し、本学の学生の生きがい充実度と7つの欲求の満足度との関係を林の数量化理論I類（別名要因分析）によって計量的に分析してみた（一般学生男女、体育専門学生男女の計4通り）。

サンプルを抽出して数量化した)。ここでは生きがい充実度を説明される変量、生きがいを求める7つの欲求のうちで満たされていると答えたものを説明変量としている。このように数理化理論I類を用いて計量的に分析することによって、各欲求領域が仮説通りに生きがい充実度に対してプラスに影響しているか否か、また、影響しているとすればその割合はどれくらいかを知ることができる。

## §2. 要因分析結果

林の数理化理論I類で分析した結果は表3に示す通りである。

表3 要因分析結果表1

(一般男子学生)

アイテ ム	カテ ゴリ ー	$\bar{x} - \bar{x}$	レンジ	標準化(%)
1. 平和な学生生活を求める心	1. 全く満たされていない 2. あまり満たされていない 3. どちらともいえない 4. まあ満たされている 5. 十分満たされている	-0.65893 -0.09457 -0.15639 0.15654 0.00061	081546	7.7
2. 生活に変化を求める心	同上	-0.97374 -0.15902 0.11689 0.28931 1.36109	2.33483	22.2
3. 未来に期待する心	同上	-0.90016 -0.35254 0.04546 1.17387 0.68344	2.07403	19.7
4. 人間関係を大切に する心	同上	-0.68571 -0.24707 -0.03666 -0.01015 1.22317	1.90888	18.1
5. 自由を求める心	同上	-0.04034 0.17316 -0.03159 0.02775 -0.53830	0.71147	6.8
6. 自分を表現する心	同上	-0.75305 -0.18873 0.08044 0.15444 0.38061	1.13366	10.8
7. 永遠なものを求める心	同上	-0.36167 0.06802 -0.01125 0.55675 -0.98918	1.54593	14.7
			1052426	100.0

N = 300 重相関係数R 0.62509  
寄与率または決定係数R<sup>2</sup> 0.39074

要因分析結果表 2

(一般女子学生)

ア イ テ ム	カ テ ゴ リ ー	$\bar{x} - \bar{x}$	レ ン ジ	標準化(%)
1. 平和な学生生活を求める心	1. 全く満たされていない 2. あまり満たされていない 3. どちらともいえない 4. まあ満たされている 5. 十分満たされている	-2.41582 -0.37306 0.00845 0.02479 0.43398	2.84980	30.0
2. 生活に変化を求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.95248 -0.40277 0.06689 0.72556 0.49524	1.67804	17.7
3. 未来に期待する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.67279 -0.28202 0.13337 0.45172 1.56452	2.23731	23.6
4. 人間関係を大切に する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	0.01463 -0.24722 -0.01910 0.05530 -0.08692	0.30251	3.2
5. 自由を求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	0.16492 0.12937 -0.03853 -0.11916 0.39660	0.51576	5.4
6. 自分を表現する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	0.61558 -0.23397 -0.02129 0.38260 0.18015	0.84956	9.0
7. 永遠なものを求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.52214 -0.16771 0.02732 0.53655 -0.11055	1.05869	11.2
			9.49167	100.0

N = 300

重相関係数 R 0.60118

寄与率または決定係数 R<sup>2</sup> 0.36142

要因分析結果表 3

(体育専門男子学生)

ア イ テ ム	カ テ ゴ リ ー	x - ̄	レ ン ジ	標 準 化 (%)
1. 平和な学生生活を求める心	1. 全く満たされていない 2. あまり満たされていない 3. どちらともいえない 4. まあ満たされている 5. 十分満たされている	-0.60520 -0.26232 -0.12578 0.23253 -0.10938	0.83773	9.8
2. 生活に変化を求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.91369 -0.01261 0.19365 0.13154 0.99906	1.91275	22.5
3. 未来に期待する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.37659 -0.56990 0.17230 0.80380 0.36775	1.37370	16.1
4. 人間関係を大切に する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.77634 -0.24446 0.12297 0.04682 0.83738	1.61373	19.0
5. 自由を求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	0.06281 -0.05690 0.05823 -0.03268 -0.16779	0.23060	2.7
6. 自分を表現する心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	1.57627 -0.19936 -0.12214 0.26594 0.48136	1.77563	20.9
7. 永遠なものを求める心	1. 同上 2. 同上 3. 同上 4. 同上 5. 同上	-0.22858 0.01233 0.11640 -0.27277 -0.65497	0.77137	9.1
			8.51551	100.0

N = 300

重相関係数R 0.55864

寄与率または決定係数R<sup>2</sup> 0.31208

要因分析結果表 4

(体育専門女子学生)

ア イ テ ム	カ テ ゴ リ ー	$\bar{x} - \bar{y}$	レンジ	標準化(%)
1. 平和な学生生活を求める心	1. 全く満たされていない 2. あまり満たされていない 3. どちらともいえない 4. まあ満たされている 5. 十分満たされている	0.09870 - 1.01422 0.00831 0.13328 1.16282	2.17704	8.7
2. 生活に変化を求める心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	- 1.38370 - 0.23977 0.16974 0.67288 1.73207	3.11577	12.4
3. 未来に期待する心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	- 1.70696 - 0.48531 0.15064 0.20246 2.01471	3.72167	14.8
4. 人間関係を大切にする心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	- 3.55274 0.57742 0.02557 0.09580 0.16360	3.71634	14.8
5. 自由を求める心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	0.06868 0.34201 - 0.11138 0.16289 - 1.75121	2.09322	8.3
6. 自分を表現する心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	1.59016 0.12535 - 0.26374 0.25933 - 4.52044	6.11060	24.3
7. 永遠なものを求める心	1. 2. 同上 3. 4. 5.	1.51088 - 0.38292 0.04271 0.05113 2.66177	4.17265	16.6
			25.10729	100.0

N = 114 重相関係数 R 0.70745  
寄与率または決定係数 R<sup>2</sup> 0.50048

表3の要因分析結果表によると、一般学生の男女、体育専門学生の男女とも、一部を除いて、各領域間の満足の度合いが高くなるにつれて生きがい充実度に対してプラスに影響するという傾向がみられ、上述した仮説がある程度説明されている(表の見方について、 $\bar{x} - \bar{y}$ の符号がプラスかマイナスかで影響のしかたがうかがえる)。

生きがい充実度にどの欲求領域がどのくらい影響を与えているかについて検討してみると、一般学生男女、体育専門学生男女間には差がみられる。この影響度は各欲求間のインパクト(スコア)の最大と最少の差(レンジ)が大きいほど高いということになる。このレンジを標準化し百分率で



影響度を示したものが図7である。

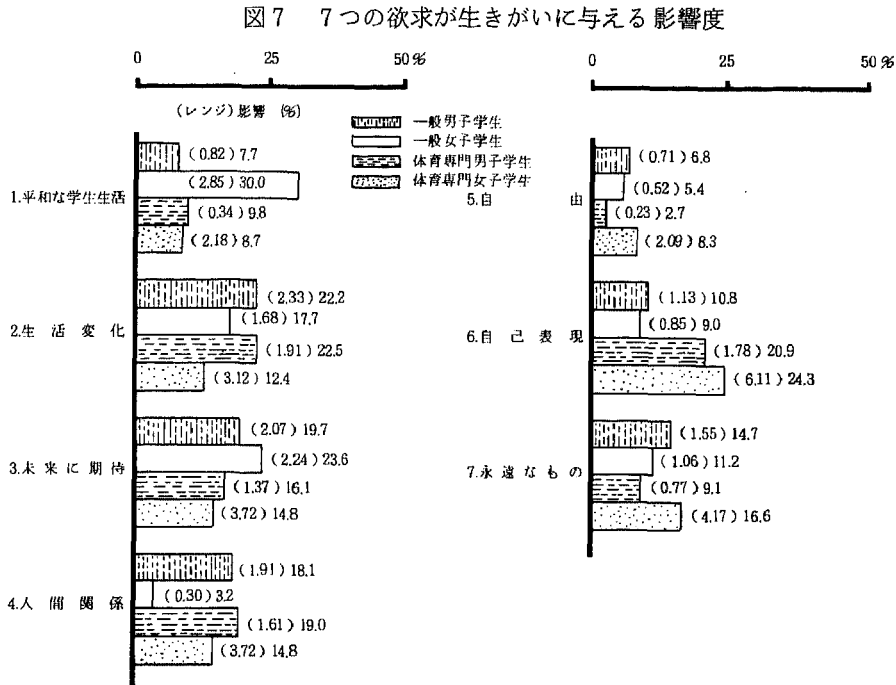


図7より生きがい充実度に影響を強く及ぼしているものの順は、一般男子学生では、「生活変化」「未来に期待」「人間関係」の欲求の順であり、一般女子学生は「平和な学生生活」「未来に期待」「生活変化」の欲求の順、体育専門男子学生の場合には、「生活変化」「自己表現」「人間関係」の欲求の順、体育専門女子学生では「自己表現」「永遠なもの」「未来に期待」「人間関係」の欲求の順である。

一般男子学生と体育専門男子学生との差として「自己表現する欲求」があげられる。これをスポーツを介する満足度として短絡的に読み取ると危険であるが、「人間関係を大切にする欲求」の満足度と生きがい充実度との関係からみても、チーム・スポーツの要因が生きがい充実度に影響を及ぼしているとみてもさしつかえないであろう。以上の結果から、正課体育ではスポーツを通して自己を表現する場を設定し、特にチーム・スポーツを教材とすることによって人間関係を豊かにする方向を重視する必要があるといえよう。また、一般学生の場合、男女とも「生活変化」「未来に期待する」欲求の項目の生きがい充実度に対する影響度が高い。このため、一般学生は日常生活における変化、生活の向上という面を強く求めていると解釈することができる。

## 第5節 まとめ

正課体育では一般学生を対象としているため、本節では一般学生のみ限定してまとめることにしたい。

① 第1節でみたように、本学の一般学生の社会意識の構造は外面的報酬よりも内面的報酬に重きを置いていること、社会的価値空間も明確であることが明らかになった。この結果から、競争志向型のスポーツ指導よりも協調志向型のスポーツ指導が可能であることが示唆された。正課体育では、特に人間関係を重視したチームプレーの出来る機会を多くする指導が必要とされよう。そのためには、一例をあげるならば、集中コースを利用した共同生活の機会を設けることなどが考えられる。

② 第2節からは、本学の一般学生の生きがい感は「生きがいあり」と「生きがいなし」の2極化の傾向があることが明らかになった。さらに、男子学生よりも女子学生の方が生きがい感が高いことも明らかであった。体育専門学生の生きがい充実度が高いという結果も合せて解釈するならば、何らかのスポーツ活動を日常生活、長期休暇に定着させて、スポーツを通して集団としてプレーする方法が生きがい充実度を高める可能性を有しているのではないかと推測できる。ただし、国民一般と比較するならば、本学の学生は全体的に「生きがいあり」の割合が高いため、問題は少ないとも解釈できる。しかしながら、「生きがいなし」と回答したグループを「生きがいあり」の方向に移行させる方法は、正課体育のみでなく、本学全体をあげて取り組むべき今後の大きな課題である。

③ 第3節から生きがいを求める7つの欲求のうち、本学の学生は「変化を求める心」を大切にしているが、満足度は低いということが明らかにされた。これを裏返すならば、筑波研究学園都市の生活は単調であり、そこから脱却しようとする意欲は強いが、それが満たされていないと解釈することができる。本学の学生の生活に変化を求める志向を正課体育のみで充たすことは難しく、そのための一つの改善策として、学生の余暇生活、スポーツライフを充実させるための正課体育の理論講義、ガイダンスにも力を入れる必要があるように思われる。

④ 第4節から本学の一般男子学生は、体育専門学生と比較して「自己表現」の生きがい充実度に対する影響度が低いことが顕著である。女子のみに限ってみても「人間関係」「自己表現」を大切に、かつ満足している割合が低い。以上の結果から、一般学生の生きがいを高めるには、人間関係を大切にすなわち自己を表現していく機会を多くしていく必要がある。正課体育において、これに対応する具体的な授業展開は容易には提言できないが、このようなデータは十分検討する必要があると思われる。

なお、第3章においてスポーツ動機と生きがい充実度との関係の詳細な分析がなされているので、そちらの結果とも合せて正課体育のあり方を模索していく必要もあろう。

(注1) D. S. バット著、浅田隆夫・松田義幸訳『文明としてのスポーツ——ヒーローの心理学』日本経済新聞社 1978年、P. 11

(注2) (財) 余暇開発センター、「季節別余暇活動調査〈夏季編〉」1977年10月実施

(注3) 7段階尺度のうち「非常に」+「かなり」+「少し」充実感があると答えた割合である。一方、「充実感なし」は「非常に」+「かなり」+「少し」充実感に欠如して割合である。

(注4) 神谷美恵子『生きがいについて』みずず書房, 1976年第21刷, P. 39—69

(注5) 余暇開発センター編『日本人のレジャー構造』ダイヤモンド社, 1974年, P. 24f

(注6) 同上, P. 23